

令和3年度 奈良市立三碓幼稚園 研究実践概要

園長名 藤次 啓順
全園児数 2名

1. 研究主題 「豊かな心をもちいきいきと活動する幼児の育成めざして」
—身近な環境（人・もの・こと）との関りを通して—

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

本園は、閑静な住宅地の中にあり、マンモス校の小学校も隣接している。しかし、園児は、年々減少し、前年度は4、5歳児の複式学級を行い、今年度は閉園に向け園児2名の学級がスタートした。前年度よりさらに人数が減り、少人数の良さを活かした行事や保育内容の見直しと工夫が必要となる。人、もの、こととの豊かな関りの中で、自ら考え主体的に生活や遊びをする事がいきいきと活動する姿につながると考えこの主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・幼児が身近なひと・もの・こととの関りの中で様々な経験を積み重ねる中で、自ら考え行動し、学びを深めるための保育者の援助や環境構成のあり方を明らかにする。

②研究の重点

- ・幼児の実態を把握し、前年度の課題を明らかにするとともに研究主題について共通理解をする。
- ・少人数での保育の良さを最大限にいかし、幼児の学びが深まるような行事のあり方や、保育内容を検討する。
- ・保護者や地域との連携を深め教育力をいかし保育内容の充実に努める。

③活動の方法

【音楽参観の二人バンド】 5歳児

今年度は園児2名の保育であったが、前年度が複式学級だったため、5歳児クラスの1年間の見通しが立っていて、1学期から「作品展はどうしよう？音楽参観はできるかな？」「大変だから今から準備しよう。」と二人で話し合っていた。その中で、A児が「ドラムをしたい。」と言い、保育室のキーボードでよく遊んでいたB児が「それなら私はキーボードをしたいから、音楽参観は二人でもできるね。」と、その時からお家の人には内緒でこっそりうまくなろうと練習していた。2学期に入り二人で曲を決めてからは、ドラムとキーボードとCDを同時に鳴らして演奏していたが、ドラムの音が大きくてキーボードが消えてしまう。音の



質や大きさなど楽器の違いに気付き、キーボードのボリュームを上げたり、ドラムを優しく叩いたり、交代で演奏したりと二人で工夫し始めた。1学期から継続して活動を重ねていたことで、ドラムを盛り上げたい部分やキーボードのソロ演奏にしたいメロディなどが見えてきた。完成が近づくと歌を歌いながら演奏したい気持ちになり、それぞれスタンドマイクも付けて本格的なバンドグループが出来上がった。保育者からの「グループの名前は何か?」という問いかけに、バンドの名前を考えることになり、「二人の名前を混ぜようか。」と意見が一致した。楽器の音の違いを感じたり友達と呼吸を合わせたり、参観で聴いてもらえて嬉しかったりと充実した活動になった。

<評価>

進級当初から二人でもできることに意識を向けて毎日の活動に取り組む中で、音楽参観も二人でたくさんのアイデアや考えを出し合いながら進めることができた。去年度複式学級で5歳児と一年間一緒に過ごしたことで一年の見通しを持ち自主的に1学期から遊びに取り入れていけたのではないかと思う。二人では様々な場面で話し合いになりやすく、意見のぶつけ合いになることが多かったが、音楽参観で二人でも楽しく演奏したいという同じ目的に向かうことで、相手の考えを聞き入れながら自分の考えも話せることができた。

【虫が食べている野菜は美味しい証拠】 5歳児

毎年植木鉢で一人ずつ野菜を植えていた栽培活動を今年は畑に一人ずつ区画をつくり、苗を買いに行くところから始めた。実際にお店に並んだたくさんの苗を見て、話を聞きながら好きな苗を選ぶことで愛着がわき、心を込めて自分で耕した畑に野菜を植えることができた。耕していると土の中から大きなミミズが出てきたが、保育者が、「ミミズは虫が落としたフンや枯れた葉っぱを栄養に変えてくれているんだよ」というと「ミミズさんありがとう。」と大事に土に返した。毎日世話をしていると葉っぱを食べる虫に気が付き「この子がフンをしたらまたミミズが栄養にしてくれるね。」と喜んでいたが、そのうち収穫前の野菜を食べる虫たちも出てきた。「私のナスが虫に食べられちゃった。」と残念がったが「虫は葉のかかった野菜は食べないから、虫が食べるという事はこの野菜は安全でとっても美味しいって言う事だよ。」と伝えると、「そうなんだ。じゃあ虫さん少しなら食べてもいいよ。」と虫に話しかけていた。



<評価>

野菜を植える活動を、苗を買いに行くところから経験したことで、自分が選んだ野菜以外の苗も育てやすさの違いや野菜によって植える季節が違う事、葉っぱの形が一つ一つ違う事などに興味をもつ事ができた。また大切に持って帰った野菜を自分の耕した畑に植え、水やりや草引きを経験することで、育てる大変さを知りなんでもスーパーで買えることについて感謝の気持ちを持つことができた。少人数だったからこそ、一つ一つの経験や疑問も丁寧に向き合い、食物連鎖の話や虫と人との共存の話など、活動を充実させることができたように思う。

5. 研究の成果

○「二人だから出来ない」のではなくて「二人だから出来る」保育内容や、行事を根本的に見直した。園児二人では、意見を交わし、友達の思いを受けいれたり、自分の気持ちに折り合いをつけたりする経験ができていく。そのため、保育者も意図的に同じ目線になって意見を言ったり、仲間の一員となり一緒に遊びを楽しみ、時には一歩引いて見守ったり気持ちに寄り添ったりしながら関わる中で、少しずつ友達の良さに気づき気持ちを理解しようとする姿につながった。また、園児が少ない為、地域の方々が何かと気をつけ、園にも足を運んで子ども達に声をかけて下さった事は、地域に愛着を感じ人との出会いを通じて豊かな心を育む基礎となった。

○一年の見通しをもてた事は、子ども達が自ら考え、主体的、意欲的に活動する姿につながった。活動に一つずつに取り組める十分な時間と空間があり、自分達が納得いくまで挑戦し十二分に取り組めた事で、達成感、充実感を味わう事が出来た。その小さな成功体験の積み重ねが自信となり、次のいきいきと活動する意欲につながった。

○身近な自然とふれ合い一年を通した栽培活動は、五感を刺激し、自然の変化のおもしろさ、不思議さを感じ、命の大切さ知ったり、食の有り難さに気づいたりするきっかけとなった。今、子ども達は何に興味を持ち、何を感じているのかを読み取り、その気持ちに寄り添ったり支えたり、その先を見据えた環境を整えていく事が大切であると確認できた。

6. 今後の課題

○4月から幼稚園は閉園になるが小学校には園児の良い面をさらに伸ばしてもらえるよう、また、経験できなかった集団生活の中での学びや葛藤を乗り越える力をつけていけるよう申し送っていく。